

第2問 次の文章を読み、以下の問1と問2に答えなさい。

20世紀以降、言語は本来境界の存在しない世界に線を引き「あれとこれは別のもの」と違い／差異を押しつけ、人間の認識を構成する「記号」にすぎないと考えられるようになる（記号論）。私たちにとっての世界は、その意味で、いわば差異の集合体／雲（水滴が連なった微細な糸の集合としての）のようなイメージで捉えうる。このように私たちの生きるこの世界が差異であると、あるいはそれが複雑に絡まりあい、高密度に充溢した差異の体系（雲）であるとしたとき、そこには原理的に表象代表されるものと、捨象されるものが生じることになる。

①現実が抽象された結果として、誰からも「あるもの」と認識される存在と、一部の人たちだけに「あるもの」と認識される存在と、そして、おそらくは存在しているのだが、あらかじめこの世に「ないもの」とされる存在があるということだ。その構造は、中心と周縁のイメージで捉えることができるだろう。この時、何が「ある」とされ、何が「ない」とされるのかは、人類の長い歴史の中で、そして現時点においてはそれぞれの地域や文化圏において、大きく異なる。ただ確実に言えることは、それぞれの時代や地域がもつその差異の集合体、言説構造は非常に強固なもので、人がその内側にいるとき、自らがどのような構造の内部にいるのかを知ることは難しいということだ（つまり近代を生きる私たちが、資本制の外部を生きることは、ほとんど不可能ということになる）。人間という存在は、生存し、世界を認識する以上、原理的、構造的に何ものかを排除せざるをえないが、何を排除しているのかはまた、これも原理的に、知りえないということである。これが絶望でなくして何であろう。つまりこれは、人が生きるということは、そのこと自体、端的に、誰かの存在を消し去り、傷つけるということを意味している。

この事実について考えるとき、私はいつも雲を想像する。密度の濃い、もくもくとした雲である。先に私は言説による差異の体系を雲と表現したが、その雲である。私たちが生き、誰かを傷つけるとき、その傷は「違いを押しつける記号」であるところの言説＝差異が単純でおおざっぱであるときほど大きくなるのではないか。例えば、それは人種や民族、国籍によりその人のことを理解しようとする場合を想像すればわかりやすい。そうではなくて、もっと緻密で、繊細で、複雑な差異をこそ受け取らねばならないのではないか。人が存在し、生き、認識するとき、知らず知らずのうちに誰かの存在を消し去り、傷つけているとするならば、現在、最も求められるのは、密度の高い、充溢した差異の体系、雲である。②人が人と真に向き合うとき、そこには雲があるような気がする。そして、真に人の心を打つ芸術にもまたこの雲があるような気がしてならない。

ある種のコマースリズムや消費主義、いま広く社会を支配するSNSは、雲の対極にあるものだろう。そこではむしろ記号は単純化されねばならない。単純化して、わかりやすくしてはじめて、多くの人が、そこに一様にカネを投じることができる。そこでは、誰もが理解しうる、おおざっぱな記号があふれかえる。そこでは個人の意見は「いいね」のひと言で表象代表される。繰り返しになるが、そのような世界には絶望しかない。世界が「いいね」のひと言で表象代表されるとき、私たちは、誰かを切り捨て、いないことにし、そして自らをもまた傷つけているのである。

私は、今こそ「受け取る」ことを思い起こしたい。差異とは一義的には言葉だが、それだけではない。たたずまいや、においや、振る舞いや、明瞭に言葉とは判別できないが、しかしながらそこで発せられている声や音もまた言語的記号、差異である。存在が発するそれらの言葉（あるいはノイズ）が受け取られるとき、その存在ははじめて存在として存在しうることになる。誰かが言葉（あるいは動作や音）を発し、それを私が受け取ることもあるだろうが、私が言葉（あるいは動作や音）を発し、私自身が、自分自身でそれらを受け取ることもあるだろう。それは自らを大切にし、また他者を大切にすることそのものである。

（山田創平編『未来のアートと倫理のために』左右社、2021年より作成）

問1 下線①の「現実が抽象された結果」という筆者の現状認識を、要約して150字以上200字以内で説明しなさい。

問2 筆者の主張を踏まえつつ、下線②の「雲がある」状態についてのあなたの体験、またはアイデアを、それが「雲がある」状態であると言える理由を含め、400字以上500字以内で自由に記述しなさい。